

Biologia

阪大理生物同窓会
No. 9 (2012)



待兼山の榎

目次

	ページ		ページ
同窓会会長挨拶	2	新卒業生名簿・同窓会連合会について	27
前同窓会会長・専攻長挨拶	3	庶務からのお知らせ	28
新任教員紹介	4	設立基金醸出者ご芳名	29
退職挨拶	5	編集後記	30
会員の広場	16	お知らせ	31
生物科学教室教職員名簿	25	同窓会役員・幹事名簿	32
生物科学専攻の研究室	26		

同窓会会長挨拶

米井 脩治（昭和41年学部卒）



2011年度の同窓会総会において森田敏照会長の後を受けて会長に選ばれました。これまでの歴代の会長に比

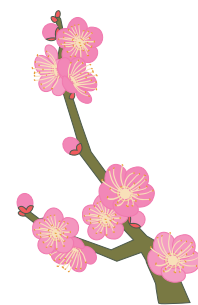
べますと経験も少ないですし、微力ではありますが同窓会の発展のために一生懸命尽したいと思っています。役員の方々、すべての会員の皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。

本同窓会の目的は、1. 会員相互の親睦を図ること、2. 大学院生物科学専攻および学部生物学科（教室と略します）の発展に寄与することであると会則に定められています。

1. につきましては、毎年5月はじめに開催されます理事会、総会さらにその後での懇親会で卒業生および在職の先生方が楽しく懇談する行事を続けています。しかし、これまでも若い卒業生の方々の参加が少ないのが課題でもあります。それぞれの卒業年度ごとに理事が決められていますが、まず理事の皆さまの理事会や総会あるいは懇親会などへの参加をぜひお願いしたいと存じます。2. 本同窓会の活動の一環として、また教室と同窓会を

繋ぐものとして、同窓会誌*Biologia*を発行してきました。今年度で9号を数えます。最近はカラー印刷になり、きれいな写真も多くなって読みやすくなっています。さらに、会員相互の交流のためや大学や教室の新しい情報を会員の皆さまに知っていただくために同窓会のホームページを立ち上げています。懐かしい学生時代の写真も見ることができますので、ぜひご利用になって下さい。役員だけでなく同窓会誌編集、名簿編集発行やホームページの管理などに携わっていただく委員の方々には心からお礼を申し上げますとともに、今後益々のご協力をお願いいたします。

同窓会の活動としまして、会誌発行や名簿の編集発行のほかにも、教室の発展さらに院生・学生諸君の就職活動への支援についてどうすればいいか考えていきたいと思っています。会員の皆さまや現職の教職員の方々あるいは院生・学生の皆さまからの同窓会の活動に対するご要望やご提案、忌憚のないご意見をお待ちしています。会員の皆さま、とくに若い卒業生の方々には、同窓会をより身近なものにお考えいただき、積極的にその活動や行事にご参加くださることを重ねてお願い申し上げます。



前同窓会会長挨拶

森田 敏照

本同窓会は初代の吉沢会長の下で同窓会の発足、同窓会誌の発刊、同窓会会員名簿の編集発行と、同窓会の基礎が作られ、ついで田沢会長は事業の継続と卒業祝賀会の共催など同窓会活動の発展の方向を示されました。先輩の先生方の後を受けて2期会長を務め、昨年11月に新会長に交代致しました。この間、同窓会誌は8号を数え、同窓会会員名簿の改定発行を行いました。2009年（平成21年）10月には、生物科学60周年記念シンポジウムの開催に当たり、理学研究科生物科学専攻・理学部生物学科に共催として協力いたしました。これらの同窓会活動に微力ながらお手伝いできましたことは大変嬉しくまた光栄と思っております。これらの活動が順調に行うことができましたのは、同窓会役員の皆様方をはじめ同窓会会員各位の同窓会に対する限りないご協力の賜物であり、特に升方前庶務幹事をはじめ学内幹事の方々、野崎会誌編集委員長と編集委員の方々、名簿発行担当の米崎幹事のご協力には心から御礼申し上げます。本当に有難うございました。

昨年11月の同窓会総会において副会長として同窓会活動にご協力いただいております米井脩治氏が会長に選出されました。米井会長の下に同窓会活動が更なる発展を期待して

おります。これまで以上に米井会長および同窓会へのご協力のほどお願い申し上げます。

内外の経済情勢がますます厳しい時代となり、その中で大阪大学も大学としての役割を果たさなければなりません。また生物科学専攻も大きな変革期を迎えようとしております。この時期に同窓会として、会員相互の交流を図るとともに生物科学専攻・理学部生物学科に何らかの形でご協力できることを願っております。

同窓会会員の皆様のご協力、ご鞭撻に対して改めてお礼を申し上げることにより会長辞任のご挨拶とさせていただきます。

専攻長挨拶

倉光 成紀

同窓会の皆様には、日頃から生物科学科・生物科学専攻に温かいご支援を賜り、感謝しております。おかげさまで、毎年ご支援いただいている卒業祝賀会なども、とても盛会です。

生物科学研究も、今世紀に入って、種々の生物のゲノム解析が急速に進むとともに、タンパク質の立体構造もアミノ酸配列から8割近くの成功率で予測できるようになり、生命現象を化学や物理学で理解できる学問領域が着実に広がりつつあります。生物科学のこの大きな変革期は、生物学教室の創設時と似ているように感じています。そのように生物科

学が大きく変革を遂げつつある時期に、4年前に創設された生物科学科の生命理学コースから初めての学部卒業生が誕生し、2012年度から新たに大学院の生物科学専攻に、生命理学コースの第一期生が誕生します。

博士課程学生をサポートするために、博士課程教育リーディングプログラム (<http://www.jsps.go.jp/j-hakasekatei/index.html>)、高度専門型理系教育指導者養成プログラム (<http://osaka-kyoiku.ac.jp/faculty/kikaku/program/ssp/index.html>)、リサーチアシスタント (RA)、その他多くのプログラムが実施されるようになりました。

また、国際化も着実に進んでおり、英語のみで講義が行われる学部コースや大学院コースが設置された他、様々なプログラムが実施

されたことによって、キャンパス内の外国人学生や教員の数は、年々増えつつあります。

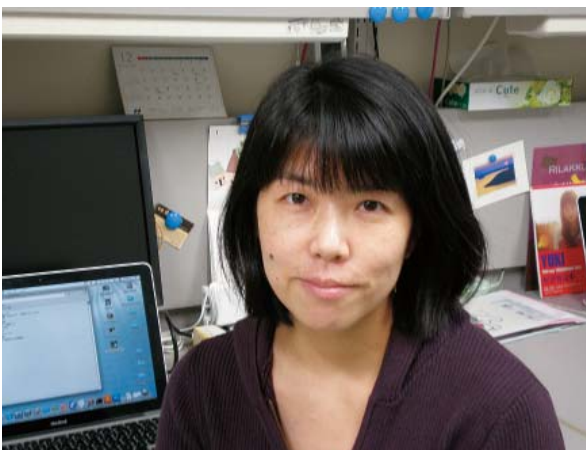
教員は、団塊の世代の教授の多くが定年を迎え、入れ替わりの時期になっています。建物は、新築や改修によって、ほぼ阪神大震災の被害から立ち直ったように思います。

春や秋の大学祭には、大学全体も公開されております。豊中キャンパスでは廊下に各学生が「マイポスター」を持ち、各自の研究を掲示するという目標が達成されつつあります。大学祭の折りには、それらをご覧ください、ぜひお立ち寄りいただき、学生達の叱咤激励をお願いします。

皆様には、同窓会で活発に交流いただくとともに、同窓会への温かいご支援を、今後ともよろしくお願い致します。

新任 教員紹介

化学・生物学複合メジャーコース
特任助教 山田 温子



H23年11月1日に、インターナショナルカレッジ、化学・生物学複合メジャーコースの特任助教として着任しました山田温子です。インターナショナルカレッジでは、グローバル30のプログラムで入学してきた外国人学生の生物学実習を主に担当しています。また、生物科学専攻の西田宏記教授の研究室に籍を置かせて頂き、研究活動にも従事しています。出身大学は東京工業大学です。東工大でホヤの初期発生に関する研究で学位を取得した後、国内外の様々な大学・研究所において、ツメガエルやクシクラゲといった動物の胚発

生を、顕微胚操作技術や分子生物学的手法を用いて解析してきました。最近は、後生動物に保存された細胞運動制御メカニズムに関心を持っています。今後は、ホヤ胚を使って、様々な動物に共通した発生のメカニズムを理

解したいと考えています。教育職に就くのは初めてですが、留学生に「大阪大学で生物学を学んで良かった」と思ってもらえるような生物学実習を実施できるように頑張りたいと思います。

退職挨拶

長い間お世話になりました…… 定年退職にあたって

常木和日子

私が大阪大学教養部に赴任したのは昭和62年ですが、その後、制度改革で理学部、理学研究科に移り、この3月で定年を迎えます。赴任時はちょうど40歳でしたので、ほぼ四半世紀の長きにわたり、大阪大学のお世話になったこととなります。この間、多くの先生方が定年で退職されましたが、自分もいずれそのような年になるとは何となく思えませんでした。しかし光陰矢のごとく、若いときには先はずいぶん

と長く思えるものですが、過ぎてしまえば束の間だったような気もいたします（写真は教養部赴任4年目の春）。

教養部の口号館には、赴任当初しばらく居住していたのみならず、自然科学棟に移った後でまた戻って来たりしました。古い建物で、かと言っても風格のある建物でもなし、といった印象でしたが、懐かしい建物です。今は大阪大学総合学術博物館内で立派なケースに収まっているマチカネワニも、当時は口号館の1階の標本室にさりげなく置かれていました。阪神大震災でこの部屋にあった液浸標本のガラス瓶も大量に割れてしまい、床一面にホルマリンが広がり、この後の処置が大変だったことを憶えています。口号館も今はすっかり改修され、共通教育の授業に出向いても、浦島太郎の気分です。

自然科学棟にいたころは、北ブロックと呼ばれていましたが、学生さんの数も急増し、にぎやかだった時代です。ただスペース的には中々



苦しい年もありました。自然科学棟の横の物理棟には敷居が高くて入り兼ねましたが、今はこの建物に共通教育の生物学実験室があるので、気軽に出入りしています。

理学部棟へ引っ越した当初は、自然科学棟時代のスタイルを踏襲しようとしたこともあり、多少の戸惑いもありましたが、その後は徐々に南ブロックと呼ばれていた理学部スタイルに馴染んできたような印象も持っています。理学部棟の生物学教室エリアの改修完了と、引っ越しと、独立行政法人化とが同時に重なり、この年、平成16年はやはり一つの節目だったように思われます。

私は大学院生時代を神奈川県のお油壺にある三崎臨海実験所ですごし、鳥根大学に職を得てからもよく隠岐の島の臨海実験所へ出向き海の動物の研究をしてきましたので、臨海実験所には縁がありました。大阪大学はなぜか臨海実験所を持たない珍しい大学ですが、大阪大学赴任後も京都大学の白浜の臨海実験所をお借りして臨海実習の担当は続けてきました。鳥根大学時代も含めれば、32年間、毎夏一度も欠かさずに臨海実習の担当をしてきたことになります。海というと私には何となく仕事のイメージが付きまわっていましたが、ようやく最近になって、仕事とは離れて海や海の生き物を見られるようになってきた気がしています。

長年にわたり、教職員の皆様、また学生の皆さんにも大変お世話になりました。これといった特筆大書できる貢献もなく大阪大学を

去ることは心苦しい次第ですが、生物科学科、生物科学専攻の益々の発展をお祈りしまして、とりとめのない小文を終わらせていただきます。長い間、誠にありがとうございました。

大阪大学理学部生物科学科を 去るにあたって

荻原 哲

私は国際基督教大学ICUを卒業。大阪大学理学部大学院の修士課程を神谷研究室で、博士課程を殿村研究室で過ごしました。博士号学位取得後は米国・アルバート・アインシュタイン医科大学でポストドク研究生活。その後縁あって大阪大学教養部に助手として着任。平成23年9月30日を持って大阪大学大学院理学研究科教授を退職しました。二十七年間同じ職場に勤務しました。移り気な私が長く働くことが出来たのは、周りの方の支えがあったからです。また自分のなかのこだわりを発見していった面白さのせいでもあります。大学教育実践センター、国際企画推進本部、産学連携本部、コミュニケーションデザインセンターを兼任して、理学部以外での仕事がかさを増していった理学部には大いにご迷惑をおかけしました。理学部の先生がたにはこの場を借りてお詫びを申し上げます。

退職は一年半早めた早期退職でした。早期退職の理由を書くとすると、さまざまなことに触れざるを得ませんので、それはどうかお許し

ください。一つだけ本当のこと、それゆえ正直に書くとすれば、国立大学の独立法人化以降の文部科学省の、すべてとは言わないが「長期的国際的展望にたつ教育政策ポリシーを持つプロジェクト提案」とは思えない、思いつきの様なプロジェクトに予算を人参のようにちらつかせて応募せよとするやり方が、私の理解を越えたためです。多くの国立大学はブランド力を失いたくないためにどんどん応募し、採択されれば山の様な仕事が教員、職員に降ってくる。一貫性（思想）のない幾つものプロジェクトに取り組むうちに、いったいこの国は教育を特に国際社会のなかでどうしたいのか、さっぱりわからなくなりました。思想がないのどうやって「評価」するのでしょうか？定年までの一年半ぐらいすぐに経つからだらだら机に座ってればいいじゃないと、「有り難い」アドバイスをくださる方もおられましたが、だらだらするのが性に合いません。一年半であろうと自分らしく生きて生きたいと思い、定年を待たず阪大を去ることを決心しました。

大学院生時代を含めると三十年を越える時間を阪大で過ごしてつらつらと思いだすこと、言い残しておきたいことは9月の最終講義「アゴラとしての大学:新しい学問と教育、国際性、社会との交わりのため」で申し上げました。また研究上の業績などについては「名誉教授」審査書類で詳細に書いていただきましたので、敢えてここで繰り返しません。それ以外のことでまだお話ししていないことを、同窓会誌の

紙面で皆さんの目につく話題として適当なものを、自分の頭の引き出しからほじくりだしてみます。

(1) 異星人

異星人・荻原先生、とある席で呼ばれました。これは私を侮辱する言葉ではなく、「地球人」にとっては違った考え方を持つ人間として映っていたのだなと受け止めました。私にはさっぱりその自覚がなく、ごく自然に生きて来たつもりです。ただ、学内行政、教育ポリシーなど分からないことがあれば「場所をわきまえ」ず「相手が誰であろうと」言いたいことは言い、問いたいことは問うて来た。大阪大学ほどの大きな組織を動かすためには、マネジメント面でのコンセンサスが必須であるといつも考えていましたからです。コンセンサスは組織内の合意形成であり、100%自分の意見を通すことでなく、逆に60~70%程度の妥協を強いられることです。ただし一旦コンセンサスが形成されたら、それに付随して責任も生じる。責任を私が果たせたかというとはなはだ疑問でもありますが、不透明から透明に到るまでの合意形成の議論にはこだわった。私自身がまず理解することが大切だったからです。多くの人がこういったことを誤解していることも知りました。「言わずもがな」を理解しない荻原先生、「沈黙は金、雄弁は銀」ということすら知らない荻原先生、日本的「コンセンサス」のない荻原先生。物事を「斟酌」出来ない異星人荻原先生だったようです。でも大変に光栄です。異星人に

耳を傾けてくれた理学研究科、研究科外の兼任部局の教員と職員の皆さん、ありがとうございます。

(2) 北ブロックと南ブロック

理学部生物学科と旧教養部生物が合併されて現在の生物科学科がある。合併前の過渡期には北ブロック、南ブロックとそれぞれが呼ばれ、さまざまな交流が始まり、現在の「ハッピーエンディング」がある。私が大学院生として知っているのは南ブロックであり、北ブロックは教員として始めてその空気に触れた。非常に大きなカルチャーの違いがあると赴任当時感じた。いまでは考えられないが、大学院生として入学して来た私は、他の講座に全く友人もおらず、ましてや他の講座の教員と話す機会もなかった。そのことは非常に精神的に私を追いつめて、入学して一ヶ月足らずで退学を考えた。神谷先生の率いる神谷研究室は素晴らしく魅力的だった。自由闊達にものをしゃべるところが大学だとはっきり言う教員たちだった。そのことを院生に伝えた姿勢も尊敬に値する。ただし講座の外に出ること、そこでさまざまな知恵に触れること、新しい技術や考え方に触れることは非常に困難であった。旧教養部に教員として赴任してまず考えたことは、私が味わった様な困難を大学院生たちに味合わせたくないということだ。そのために何をすべきか、ということ計画し始めた。時間はかかったが大講座制が幸いして、教育問題、共通機器有効利用などの議論がすべての教員を

巻き込んで実にフェアプレー精神の中で構造改革が進められた。教員に固有のスペースはなく、すべてが共通のスペースであるというコンセンサスをまず形成した。その結果、実験室はすべて原則共通スペース。機能別に「生化学実験室」「顕微鏡解析実験室」などに区分され、すべての教員とすべての学生が自由に出入りできるようにした。この時代の北ブロックから誕生した若手研究者たちは、まるで梁山泊に集まる輩のような気配を漂わせていた。彼らの国内外での活躍は私の大きな誇りである。

(3) 教育と研究

理学部生物学科と旧教養部生物合併後の教員の職務の微妙な色分け、すなわち北ブロック=教育重点、南ブロック=研究重点という、特に方針としても確認もされず自然になだれ込むようになった運営に対しては今でもかなり複雑な思いを抱いている。よく、大学の機能は教育と研究の二本柱と言う。旧教養部時代にこんな経験がある。教育と研究のバランスについて悩んだ時期に自ら答えを出せず、お二人の尊敬する先達に相談した。一人は神谷先生。もう一人はICUで数学を教わった絹川先生。お二人からは異なったニュアンスであるが同じ意味のご返事を頂いた。絹川先生はシカゴ大学大学院時代の指導教員に私と同じ様な質問を、後にICU教員になってからしたそうである。良質な少人数教育を実践していたICUでは研究に費やす時間の確保が常に教員の悩みの種である。シカゴ大学の指導教員からは「両

方できて大学の教員である、両方に全力を尽くせ」というメッセージが返って来たそうである。神谷先生と絹川先生のお言葉は深く私の中に浸透した。

教育とは担当授業、配属された大学院生指導だけを意味するものではない。それらのことをより効率的に進め、質を高めるための方策、何よりも学生の立場に立って、その人たちが将来どこでどのように生きようが、教員として知識と同時に知恵を授けることを意味する。学科レベル、大学院レベル、研究科レベル、全学レベルと異なった階層性が持つ異なったポリシーとカルチャーを認めつつも、大学が人を育てる場所であることだけは忘れてたくない。知識は必要であるが、知恵がないと上手に使えない。大学に教員は留まるが、学生は通り過ぎる場所なのである。その一瞬の時間をチャンスとしてとらえて彼らの成長を促すこと。それが歴史の中での教員の役割ではないでしょうか？

(4) いま

退職して、現職の先生方には申し訳ありませんが、とにかく「一休み」はできています。緊張がほぐれた脳みそを使って外から大学を見ると、やはり閉じた世界、情報発信がほとんど感じられない場に見えます。とにかく見えません。これは内にいたときにはそれほど深刻には感じませんでしたが、大学が持つクオリティと可能性をもっと社会に知ってもらう必要をいまは感じています。下記「コンサートシリーズ」が大学を開かれた場にする一助になればと、

自分に馬力を注入しているところです。

東京から引っ越してきた母はまだまだ介護が必要な段階ではありませんが、いずれは。長年住み慣れた東京を離れての大阪での生活への適応ができるのか非常に心配しましたが、「毎日がとてもたのしい、友達もたくさん出来た」ようです。上手に齢を重ねて行くのも才能がいる、と母を見ていると気づかされます。これまでの長年の親不孝を挽回するべく、私なりに孝行を始めました。といっても他愛のないことで、一緒に食事したり、お茶を飲んだり、買い物に行ったりです。家族について言えば、妻の支えがあって研究生活、長時間勤務が可能になっていたのも、料理（私は結構好きで上手です!）、家事の分担をすることで、共稼ぎの方針を崩さずにやってきた結果、生じた不平等夫婦関係の改善を図っている。

(5) これから

私がこれから何をするのか、いまは一休みなのか、阪大あるいは大学という場を永遠に去るのかそうでないのか、多くの方に聞かれます。私でなく人様が答えを与えてくれるでしょう。ただ、一つだけ新しいプロジェクトをはじめます。改装して生まれ変わった「大阪大学会館」（旧イ号館）の講堂を使わせていただいて、音楽コンサートシリーズを始めます。ワンコインコンサート。500円。この企画の賛同者は学内外を含めて100名に達しました。1920年製のベーゼンドルファー・ピアノを常設しているホールなど日本、海外どこを探してもありま

せん。素晴らしいピアノです。月に一回、年10回のペースです。「一流の演奏を市民に」をスローガンに池田市、豊中市、箕面市、豊中市と阪大にゆかりのある市中心の住民と学内の皆さんに聴いてもらう。初回は5月18日。パリからジュヴァニネッティ氏（パリ音楽院教授、ヴァイオリニスト）が来てくれます。ピアニストは青柳いづみこ氏。文筆家としてもご活躍。お二人のデュオが前半。後半はドビュッシーの未完のオペラ「アッシャー家の崩壊」紹介のレクチャーコンサートです。ぜひ聴きにきてください。

ホームページ：

<https://sites.google.com/site/concertb252/>

待兼山での 14 年の日々

金澤 浩

1997年の秋に赴任した阪大を後2ヶ月半ほどで去ろうとしている。14年の日々は、阪大生物学科への思いを深くする日々であった。この14年は私の一生の中心をなす出来事であり、良き思い出となろう。この阪大への思いがどのように作られていったか、この場を頂いて記憶を形にして残したい。

大阪大学に至る道

東大薬学系大学院の博士2年の時、修士課程で研究していたリボゾームの分子生物学を離れ、後に東大理学部教授となられた安楽泰宏先生のご指導の下で大腸菌の膜輸送体

の研究をする機会を頂いた。安楽先生は、当時結成されたばかりの生体エネルギー討論会で、酵素動力学を主体とするイオン輸送性ATPaseに関する阪大生物学科の殿村教授の研究成果とその進捗をお聴きになり、我々に興奮した様子で話してくださった。私が阪大理学部生物学科と生体エネルギー学に邂逅した瞬間であった。その当時は、その後阪大理学部にも勤めるなど考えもしなかった。まして、生体エネルギー討論会の創設の中心を担った向畑恭男先生の阪大理学部5階の居室の跡に、自分の研究室を構えるなど夢想だにしなかった。

米国で博士研究員を一年半ほど勤めたあと、岡山大学薬学部にも新設された二井将光教授の主催する研究室の助手に1978年に採用され、生体エネルギー論の中核をなすF-ATPaseの遺伝子のクローニングの機会を頂いた。さらに米国留学で学んだ突然変異体分離の新しい手法を使ってこの酵素の機能変異体を集中的に多数採集し、遺伝子解析と生化学をうまく組み合わせることに成功した。幸運であった。こうして膜タンパク質の構造・機能相関の解析に先鞭をつけることができた。この間、生化学、酵素学、生体エネルギー学に加えて、創出されたばかりの遺伝子工学も学ばねばならず、苦しくも楽しい日々が続いた。こうしていつの間にか生体エネルギー論の中核に迫ることになり、その中心地である阪大生物学科は、私には無縁ではない地として学生の時から再び浮かび上がってきた。この頃、F-ATPase

を大量に精製するために、大量の大腸菌を培養していたが、最後には阪大にしかなかった大型ファーメンターをお借りした。松原央先生のご許可のもと長谷俊治先生にご指導いただいたが、このときに初めて阪大理学部内を見学した。

岡山大学工学部生物工学科

1980年頃、生体エネルギー学研究討論会で遺伝子工学を取り入れて研究成果を話したのは、私たちだけだった。プロトン駆動力はどのようにATP合成に使われるのかという命題は、F-ATPase内のプロトン輸送路を明らかにするしかないと思えた。興味深くまたきわめて重要な課題であり、分子遺伝学と生化学によりアミノ酸残基一つのもつ機能的役割を追求することが、問題解決への糸口になると考えられた。一方で、今盛んな構造生物学的手法を取り入れなければ最終的な理解にはならないと、そのころから考えていた。私には道の遠いことに感じられた。この頃手法として取り入れ学ぶことが沢山あった遺伝子工学が、恐ろしい勢いで発展していた。当時まだ日本ではほとんど行われていなかったDNAの塩基配列決定法を、国立がんセンター研究所の関谷剛男先生から教えて頂いた。その後ある日突然に先生から連絡があり、先生が部長となり主催する予定のがん遺伝子研究室へ加わらないかと誘われた。180度の方向転換だったが、意を決した。1985年頃である。がんセンターで細胞生物学を根本から教えて頂き、人間の分子生

物学に目が開かれた。これがきっかけとなりその後新設された岡山大学工学部の生物応用工学科の初代教授の職につくことができた。1989年当時一期生の学生は学部2年次であったが、大学の建物建設予定地の遺跡調査のために赴任後2年間は建物ができなかった。なによりも問題は、工学部に生物学に基づく学科、教育体制を作ろうとしても、日本中どこにもまだ先例がなかったことである。遺伝子工学、タンパク質工学、細胞工学、など今では当たり前となった生物工学の基礎カリキュラムを体系的に作り上げ、どのような人材を輩出すべきか、同僚と毎日議論を重ねることから出発しなければならなかった。“生物工学のための遺伝子工学”と題する教科書をこの時に執筆した。すべてが新しく苦勞を伴ったが、とてもやりがいのあることであった。我々の後に、日本中の国立、私立の工学部に生物工学科が並び立った。

大阪大学での始まり

人生の変化はある日突然に訪れる。岡山でのゼロからのスタートから9年の後には、研究室も研究体制も、そして暗中模索だった教育方向にも光が見えてきた。その時に、縁あって大阪大学に転任した。岡山大学でも、また大阪大学の知り合いからも、この私の選択はとても意外であるとの感想が寄せられた。1997年の秋である。動機は明確だった。F-ATPase研究からがんセンター時代に離れていたが、私にとって科学的興味を中心の一つは、プロトンによるタンパク質の動的変化の本質を見極

めたいという願望であった。こうした問題意識を解決し研究を実現する最適な学問的環境は、心に永く留まっていた大阪大学理学部に思えたからだ。北ブロックに頂いた研究室の面積は岡山大学時代の半分以下でありスタッフ枠も一人減った。変化のためにATPaseの研究に加えて岡山時代から始めた Na^+/H^+ 交換輸送体を研究の主軸に据えた。イオン輸送のもっとも本質であるイオン輸送体の動的変化とイオン輸送の関係を知りたいと考えていたが、プロトンは分子内のどこにでも存在する。構造生物学を取り入れても最終理解は難しいと感じていたからだ。 Na^+ が輸送基質ならいずれイオンの移動は可視化できると考えていた。また、膜のイオン輸送体は、膜内在性のイオン透過に必要な部分とイオン透過を制御し駆動する膜表在性部分に分けられる。イオン透過の仕組みを知るには、ポンプより単純な構造をもつイオン輸送トランスポーターを研究対象とする方が、制御と透過の二つの部分からなるF-ATPaseより、疑問に答えるのに適していると考えた。また一方で積極的にトランスポーターの外在性の制御因子を探索することも併せて必要と考えた。こうした考えに基づきこの



14年間研究を進めてきた。

最初に研究室の場として与えられた豊中キャンパスの北ブロックの方々は、皆新参者の私に親切にしてくださった。みなさん自分の思う研究と方向をのびのびとされているという印象であった。薬学部、医学部（がんセンター研）、工学部と経験した私には、理学部的考え方、生き方はすべて新鮮に映った。2年間の阪大と岡大の併任期間中2つの研究室を運営した。2年目の夏には二つの研究室の学生20数名すべてが小豆島に一緒に集まり、勉強会と懇親会をした。思い出深い出来事だった。

大阪大学生物学科同窓会

阪大2年目に学科長と専攻長の職を果たすことになった。すでに10年近い教授経験があったので、新任だったが引き受けざるを得なかった。専攻長として最も重要な仕事は、生物学科創立50周年を祝うことであった。このために卒業生を招かねばならず、その住所の台帳が必要となった。しかし、多くの研究室が整備できていなかった。そこで岡山時代に知ることとなった姫路の同窓会名簿作成を事業とする出版社に頼み、同窓会名簿をつくることとし、これを学科のみなさんに提案した。しかし、これは思ったほど簡単ではなかった。提案直後に同窓会創設自体に反対する、という強烈なメールを卒業生から受け取った。阪大生物は同窓会を作らないことが特徴であり誇りなのだという意見であった。人間は一人では生きていけない。“一人で生きていけると思うのは幻

想だ”というのが私の人一倍強い根本理念である。そのために誰とも友達になりたいと強く思っている。ヒトの絆が生物学科の存在を意義づけるという当たり前のことにこだわった。こうしてできた同窓会に寄稿を今依頼されている。喜びと感慨は深い。

大阪大学の仲間

生体エネルギー論の牙城と思っていた阪大生物では多彩な研究が進んでいた。特に顕微鏡を用いた細胞生物学がもっとも魅力的に見えた。大学院生物科学専攻を構成する研究者は、日本の分子生物学と細胞生物学の中心の一つを作るにふさわしい人々だった。幸いレーザー蛍光顕微鏡も入手でき、イオン輸送体の細胞機能における意味やその動態を問う研究がスタートできた。岡山大学でスタートしたこの一連の研究は、准教授や助教として協力してくださった能見貴人、三木順詞、大塚智恵、村上宏、村口元（以上岡山大学）、井上弘樹、中村徳弘、三井慶治、松下昌史、の各氏と彼らに指導された大学院生の努力により可能となり、大きく発展した。2011年11月に一つの到達点に達する論文をJ. Biol. Chem. 誌に発表し、併せて総説を生化学誌{2010年}とBiochemistry誌（2011年）に上梓した。

阪大の学生たち

薬学部と工学部に在籍した経験から阪大生物学科学生の少人数は、特別な存在に見えた。これほど手厚く教育されているところは、他にはないだろうというのが最初の印象である。学

生も期待に応じて自分でよく考え、研究に対する気持ちも篤い。特に、いろいろな学生に関わる行事に学生が主体的に関わるという伝統は、貴重である。一方、この数年大学では教員の研究重視の姿勢が徹底的に疑問をもって問われ続けてきた。学生の授業評価に始まり、講義内容の飽くなき改善である。これは確かに効を奏している。教育に無頓着な教員には大いに反省を促す好機であった。しかし、これと併行して学生の自主性の欠如に問題が発生している。黒板に書く字の書き方、資料の配置と親切さなど小学生なみの要求は高まるばかりである。私の学生の頃と違って、講義のあとに宿題を出すと大いに喜ばれる。何を勉強してよいかわからないので、宿題は勉強の指針となるというのだ。その通りかもしれないが、自分で疑問をもつことがモチベーション形成に必須なのだが、という疑問は残る。阪大生物に関しても問題がないわけではなかった。教員の努力に比例して学生の自主性は低下し、博士後期課程から研究者を目指す人数も減少している。一言で言えば、少人数のメリットだけでなくデメリットが感じられた。私の師である東大の水野伝一先生は、家庭教師が教育にとって最高かという、そうではないと40年前に我々を前にいわれた。目から鱗であった。学ぶもの間での切磋琢磨は、スクールにしかないといわれていた。人間性を育むのに必要な要素だといわれたのが忘れられない。真実であり、スクールに生きる我々教員の生きる理由

である。学生は困ったことがあったときに誰に相談するのかという質問に、ほとんどが同級生、同年代の友人であり、教師は彼らにとって最後の選択だと、調査でも示されている。切磋琢磨と連帯と学科の活力は、どうすれば得られるのか？ 一つは仲間（定員）を増やすこと。もう一つは学生に多様性をもたせることである。

生物科学科の拡充

こうした思いや考えが心に芽生えた時に、これまで夢であった学科の定員拡充が可能になる局面が出てきた。大阪外国語大学の阪大への統合に伴う定員調整で、阪大内で数少ない入学時の競争率の高い生物学科の定員拡充が容認されたのであった。これにはその前に、学科の将来方向を巡っての学科内での議論の末に大学当局へ出していた学科拡充の概算要求が、下地にあった。当時いくつかの理由で理学部の数学、物理学、化学の各学科から学生定員を1-2名割譲して頂くことになったが、この経緯は大学本部にも理解されることになったというのが真実である。生物科学科はその社会的必要性に見合ったサイズではないという事実である。定員拡充提案の作文に、私は心底努力した。人数を増やすだけでなく、物理学や数学に強い生命科学者の養成ということを標語にし、学生の考え方の多様性とそこから生まれる切磋琢磨を期待した。この経緯はこの同窓会誌に以前報告させていただいた。こうして迎えた最初の学生が私の退職と同時

期に巣立つ。彼らの未来の発展に期待している。ただ学科の定員増の効果は、必ずしも思惑通りには現在っていない。しかし、生物学科に学ぶものが、多くの多様な人材に遭遇し、切磋琢磨し成長することは、今後のために必須だと信じて疑わない。

終わりに

14年の間に、阪大生物科学の高い学問レベルに大いに学ばされた。幸運なことであった。一方で阪大卒業生の自分たちの伝統に固執するところに時には辟易としたのも事実である。それだけ卒業生達が自分たちの歴史に誇りをもっていることは、素晴らしく、また私には驚きでもあったが。私も自分の信じることを進めて、一部は理解してもらった。

これからの生命科学はどこに向けて最も発展するのだろうか。それに呼応し先取りしなければ生物学科は、絶えることになるだろう。次を担う新しさを今の学科の責任者たちは常に模索している。この姿勢は素晴らしい。同窓会からも多くのご教示、ご意見を頂くべきである。きっと未来は開けるものと確信している。

自宅が待兼山なので、この14年の日々はほとんどが待兼山の山の上とその周辺で過ぎていった。春は見事な桜、秋は美しい紅葉を楽しめる地である。この間待兼山で私の生活と研究教育を支えてくださった学科の同僚、支援の事務の方々、学生、そして私の家族、友人、先輩に、それと自然を多く残す美しい待兼山の環境に、最後に心から感謝を申し上げたい。

生物科学専攻での 四年半を振り返って

弘前大学農学生命科学部生物学科 西野 敦雄

2007年7月以来、4年半の間、西田宏記教授の主催する発生生物学研究室の助教としてお世話になりました。愛知県岡崎市にある自然科学研究機構の、主にポスドクが働く研究室で、一人で淡々と研究する立場にどっぷり漬かっていたので、当初は大学院や学部の学生さんたちとダンゴになって進んでいくスタイルにピンときてなくて、周囲の皆さんにはご迷惑をおかけしたかもしれません（最後までおかけしたかもしれません）。

私はここで、よい教員であったとは思えませんが、教員となるためのよい修行をさせていただいたと思います。特にここのスタッフの方々の寛大でオープンな、飾らないお人柄が、とても私にはありがたく感じられていました。この大阪大学の理学部生物学科には、それを支えるカルチャーがあるのだと思います。この伝統が末永く受け継がれますようにと願っております。

ここで私が関わった全ての皆さま、特に学生の皆さんには、これまでに渡る数々の私の至らなさに対してお詫び申し上げるとともに、今後のますますのご発展を祈り上げます。お世話になりました。ありがとうございました。

阪大理生物への思い

三井 慶治

私が阪大理生物に来たのは、平成11年（1999年）春でした。まだ学生で、大学院（阪大理生物）入学のためでした。あのころ、私が所属した生体膜機能学研究室（金澤浩教授）は、理学部本館とは離れた自然科学棟にあり、少数の研究室で皆仲良く、和気あいあいと、日々研究に打ち込んだことが思い出されます。

また、大学院を修了してからも、助手、助教として、この素晴らしい阪大理生物に長く関わられたことをうれしく思います。嬉しかったこと、苦しかったこと、いろんな場面が思いおこされますが、理解のある先生方、優れた学生たちに恵まれ、自分の力を発揮できる環境にめぐり合えたことは、私にとって最高の幸せであったと感慨を新たにしております。

月日の流れるのは早いもので、学生として阪大理生物に来てから、もう12年経ち、私も、やっと(?)阪大理生物を巣立って新たな職場にて働くこととなりました。少し寂しい気持ちもありますが、阪大理生物での様々な経験を糧に、がんばる所存です。

最後に皆様のご健勝とご活躍を、そして阪大理生物のますますのご発展をお祈りします。本当にありがとうございました。

会|員|の|広|場|

皆様に助けられて

大阪医科大学 生物学教室
原田 明子

阪大生物学科との縁が始まったのは、私が神戸大理学部3回生の時でした。卒業研究の配属研究室を決める時期でしたがピンとくる研究室がなく、当時神戸大助教授だった新勝光先生に相談に伺ったのでした。新先生は先生の阪大大学院時代の同級生でもある永井玲子先生を紹介して下さい、もし永井研で研究したいなら、書面上の指導教官は僕がやるから4回生から永井研で実験させてもらいなさい、と言って下さいました。私は、永井研の温かい雰囲気すぐに魅了され、お世話になることにしました。この時、私は博士課程まで進学するつもりは全くなく、まして研究を続けるなど思ってもいませんでした。新先生にもその旨を話していましたが、先生は「修士取って、その後、じいっと3年間我慢した



永井研同窓会 (2010年6月)

らドクター取れますやろ、それからどこか私立大にでも滑り込まれへんかなあ」というようなことを呪文のように唱えておられました。結局、「じいっと3年間」では学位は取れませんでしたし(5年半かかりました)、学位取得後6年強のポスドク生活でしごかれてからでしたが、4年前に今の職場(私立大である)に滑り込みました。新先生の呪文が現実のものになるとは。新先生の導きに改めて感謝申し上げます。

さて、神戸から石橋にモグリで通い始めましたが、さっぱり研究は落ちこぼれでした。ただ、学位取得まで面倒を見て下さった高木慎吾さんと永井さんの研究に関する議論は、内容で対立していてもとても楽しそうで、この輪の中に入りたいというのが私の原動力でした。永井さんと高木さんは、学会や班会議などに私を連れ、たくさんの方を紹介して下さいました。知り合いが増えるにつれ研究も楽しくなり、岡崎芳次さん(大阪医科大)と阪大生物の先輩でもある福原敏行さん(東京農工大)には研究室に半年以上滞在して研究させていただき、また永井さんの後任で来られた寺島一郎さん(現東京大)を始め、名前を挙げきれないほど多数の方にお世話になり、学位を取得しました。この間、永井研の大先輩でもある大須賀久美子さんのおられる専門学校で非常勤講師をさせていただくなどのお世話にもなりました。

学位取得後はまず理研植物科学センター

の酒井達也さん（現新潟大学）、岡田清孝先生（現基礎生物学研究所長）の研究室のポスドク研究員となりました。酒井さんは、シロイヌナズナを用いた解析により、光屈性や気孔開口などにかかわる青色光受容体フォトトロピン（phot1とphot2）のうちのphot2を加川貴俊博士、和田正三教授（当時東京都立大）のグループとともに発見し、ScienceとPNASに論文を発表したばかりの若手研究者でした。酒井さんの方針は「とにかく働く」で、みっちり分子遺伝学的手法を仕込んでもらいました。大変厳しく毎日泣きそうでしたが、酒井さんと研究の話をするのは楽しく、同僚にも恵まれ、やはり明るく研究生を送っていたようでした。というのも、このポストは1年契約の年棒制で、酒井さんが毎年評価表を作成してそれをもとに翌年の年棒と翌々年の更新を決めるというスリリングなものだったのですが、ポスドク1年目にexcellentと評価されたのは、「研究を楽しく行い研究室の雰囲気をも明るくしている」ことだけだったのです。こんなことを褒められても、と複雑な気分でしたが、まあこれが私の唯一の売りなんですね……。翌年には、葉の細胞でphot1、phot2に依存して青色光によりサイトソルCa²⁺濃度が上昇することなどを示した論文が受理され、酒井さんからの評価も少し上がりました。また「ここで学ぶことは学んだらうから、九州大の島崎研一郎先生のところなどで別の研究手法を

勉強してみたら？」と、学振特別研究員として九大に移るきっかけとなる一言をいただきました。

島崎先生は植物の気孔孔辺細胞における情報伝達経路研究の大家です。私も孔辺細胞を用いてフォトトロピンに依存したCa²⁺シグナルの研究を続けさせてもらいました。情報伝達が1細胞内で完結している孔辺細胞を用いれば、研究を発展させられるだろう、と意欲を持って福岡へ乗り込んだのですが、横道にそれたデータに執着してしまい、福岡生活の後半は次の職探しの焦りもあり、落ち着いて研究できませんでした。反省です。とはいえ、島崎先生から学んだことは計り知れません。同じデータを見ても解釈が私とは全く違ってユニークな上に緻密で、質の高い研究がどのようにうみ出されているのかを大いに学んだ3年9か月でした。

（現在の私をとりまく同窓の方々の紹介）

さて、前述の大阪医大の岡崎さんに声をかけていただき現在の職場に赴任して4年がたちました。理学部で育った私にとって医学部は分からないことだらけですが、岡崎さん始め、周りの方に支えられなんとかやっています。最後に私を支えて下さっている2人の同窓の方をご紹介します。まず、大阪医大生化学教室の中井（末次）由実さん（松原研出身）です。中井さんは真核生物の細胞内の含硫小分子（鉄硫黄クラスター、モリブデンコファクター、硫黄修飾tRNAなど）へ



中井（末次）さん、原田、三原（森崎）さんと一星君

の硫黄付加に関わるタンパク質の機能などについて研究をなさっています。中井さんとは初めてお会いした時から意気投合し、毎日のように（食べたり飲んだりしながら）研究のことなど何でも相談にのっていただいています。同じ大学に中井さんがおられたことは幸運以外のなにものでもありません。昨年より共同研究も始めており、お互いに切磋琢磨しつつ、勉強させてもらっています。

もう一人は修士の時に同級生だった三原（森崎）加寿代さん（徳永研出身）です。三原さんは生命科学系英語の翻訳者としての仕事を在宅でされていますが、週1回、三原さんの小学生の長男（一星君）が学校から帰ってくるまでの時間、実験の手伝いに来てもらっています。翻訳の仕事を立派にされているのにこんな仕事をお願いして大丈夫かしらと恐る恐る連絡したのですが、実験が大好きだし、自宅での仕事が毎日続くと息がつまり

そうなので週1回くらいどこかで仕事できないかと思っていたところだ、というありがたい返事をもらいました。当然ながら三原さんの実験の腕は素晴らしく、お蔭で少しずつ研究が進み始めています。不器用な私が研究、教育業務の両方をこなすのはとても難しいのですが、お二人には仕事面でも精神面でも支えていただき、大変感謝しています。

長々と書いてしまいましたが、振り返ると、様々なタイプの研究者のご指導のもとで、大変恵まれた研究生活を送ってきたと思います。まだまだ落ちこぼれたままの私ですが、ベストを尽くしていきたいと思います。今後どうぞよろしく願いいたします。

“Farewell” という前に 少し人生前半の思い出を

松原 央（新制1期生）

私は1930年に大阪市西区で生まれた。病弱な幼少期を経たが、第二次世界大戦で食糧難が続き、お陰さま（というのも変だが）で好き嫌いがなくなり健康になって中学卒業時には精勤賞をいただいた。中学（旧制高津）2年の3月14日大阪は米軍機B29の爆撃で焦土と化し、8月には敗戦を迎えた。旧制大高は



たった1年で阪大受験となり、所謂バンカラ生活十分享受できなかった。母の故郷奈良県王寺から13年ほどSLとジーゼル列車で通学した。

理学部が中之島にあった頃に生物学科14名は物理学、化学なども受講した。印象に残る講義（内容は別として）では浅田常三郎先生の物理化学。いつも講義時間ぎりぎりに大講義室に駆けつけ汗をかきながら大阪弁（堺弁？）でまくしたてておられた。試験は1問題を出しておいて「夕方までに提出するように」と行って研究室に帰られた。生物の14名は地下の溜まり場で回答を喧喧諤諤検討しこれぞと思うものを1つに纏め同一答案を各自提出した。全員合格。無機化学の植田龍太郎先生の硫安亡国論、膠質学佐田教授のチクソトロピー・ダイラタンシー論、ドイツ語原文有機化学教科書（ガッターマン）の輪読会などなど。生物学科専門では神谷先生の粘菌の運動や原形質流動（同じ講義を学部、院を通じて何回か聞く羽目に）、奥貫先生の醗酵化学や代謝の細微にわたる板書（当時生化学の教科書は一般に普及していなかった）には参った。ノートの手記が大変だったが私には相性が良かったようだ。講義の一環として灘の酒蔵やビール会社での実習（？）は大満足。当時「寿屋、今のサントリー」での試飲会で私は5種類の鑑定に合格。私も後日この予期実習を引き継いだ。本状先生の「マイマイの運動」でノートを後で見直しても何を

習ったのか分からなかった。ただ研修で天王寺動物園や京大白浜臨海実習は今も頭に残っている。赤堀先生の有機化学は前列の席でないとよく聞き取れないのが難であった。院での講義で、ある時、先生は教壇で黒板に向かってしばし無言の後、「今日は止めた」とさっさと研究室に帰られた。後で教員に、「昨日の飲み過ぎ」と聞いて納得。市大の小谷教授の特別講義で我々がノートを取ろうとした途端、「ノートを取るな！」の一喝。伊勢村先生は物理化学のようで表面膜の形成でタンパク質の分子量を推測する、というのがあった。二国先生の糖質化学は苦手だった。異性体が多くて。そして吉川先生の遺伝学（当時は分子が良く分かっていなかった）で染色体のいろいろの変化にはついていけなかった。今の分子化学があったらもっと理解も深み楽しかったかも。さて、学部4年で研究室配属となり、14名の中7名が奥貫研に入った。私のテーマは「ケラチナーゼ」で当時は回虫駆除の目的だったと思う。F. サンガーの“The Enzymes”にはたった一行「クラチンを分解する酵素」とあった。そこで川向こうにあった阪大病院屋上の散髪屋に断髪が欲しいと頼んだところ、主は「これは今朝の未婚の女性のものだ」と一束の長い毛髪をくれた。何だか勿体ない気持ちながら、これを小分けにして田舎の畑のあちこちに埋め、一ヶ月ほど後に毛髪の分解の様子を顕微鏡で観察した。しかし大した変化もなく、直接の指導者

萩原先生の助言で、三共製薬大阪工場で扱っていた細菌プロテアーゼが有効と判り、テーマを勝手に変更し、結局はこれが博士論文につながった。奥貫先生はよく「悪戯をしてごらん」と言われた。与えられたテーマから逸れてもそれなりの成果が挙げれば良しとされた。萩原さんは温故知新、古い文献を精査して改良を加え新技術の発明に繋げた。科学は新技術によって発展するというのがモットーのようであった。プロテアーゼの単離精製、結晶化にリバノールの利用、珪藻土（濾過助材）の使用、新規合成樹脂顆粒でのカラムクロマトグラフィーなどなど後日の私の研究過程でも大いに役立った。大きいカラムクロマトは時間がかかる。その間囲碁で時間をつぶしたことも度々だったが、こんな余裕もあっていいのではないかとも思う。

研究室には尾田助教授、巖佐、稲垣両助手、萩原講師がおられた。有機合成は稲垣さんに習った。DFP（有機燐農薬で神経毒、プロテアーゼ、エステラーゼの阻害剤、サリンと同様）やペプチドの合成を手がけた。私の緑内障をその時の後遺症と眼科医は言うが？DFPが反応する細菌プロテアーゼの反応部位をセリンとして、J.Biochem. (Tokyo) に発表していたが、F. サンガーは見逃したのか同じ結論を別の雑誌に引用なく発表。敗戦国の雑誌は特に欧州では普及率が悪く残念であった。ごまめの歯軋りか！

他に特記すべきは初期の頃の教室挙げての

近郊へのバスツアー、寸劇競演会、その折に提供された奥貫研特製密造酒「貫正宗」などがある。

1958年6月博士課程修了。医学部薬理学教室助手に。同級生二人も次々と採用されたが、教授の（我々にとっての）異常な運営、研究体制に順応できず次々と退職した。私はハワイ大学へ博士研究員として赴任。K. T. ヤスノブさんのもとでヒト心筋チトクロームcの単離精製と酸化還元に伴う電気泳動変化を調べて発表。ハワイは住むにはいい所だがついのんびりと過ごしてしまう恐れあり。日本にまだ空席がなく、もう一年どこかで過ごすよとの奥貫先生の通達とユタ大学のE. L. スミス先生の求人とが合致して、6ヶ月の子供を連れて3人は雪積もるソルトレークの空港に降り立った。空は黒く掃き溜めの黒い雪世界に落胆したが、1962年1月からは蛋白質化学を学び、ヒトチトクロームcの構造を決めて帰阪。思えばユタ州での一年余は公私ともに充実していた。北にイエローストーン、南にグランドキャニオン、東にロッキー山脈、西に砂漠を控え、研究の重圧から逃れるには最適の環境があった。冬のスキーも楽し。

奥貫研での2年間も良き研究共同者(K. A.)を得てウシcのヨード酢酸修飾反応でヘム鉄配位子と分子の酸化還元に伴う構造変化について成果を得た。が、当時の我が国の研究環境に満足できず、先生には申し訳なかつ

たが、永住権を求めて再渡米を決断、UCバークリー校宇宙科学研究所に着任した。部屋の立ち上げ、研究助手や博士研究員の採択教育、研究費の調達と研究テーマの選択など忙しい日々が続いた。一方とても楽しい趣味に目覚めたのもこの地に来たからこそであったろう。それは珪化木の収集であった。日本では経験のなかった化石と接触し、それがとても多様で、美しい珪化木の魅力に取りつかれることになってしまった。後に一般の化石や鉱物にも広がって、家族に迷惑をかける羽目となっている。研究ではフェレドキシンの構造比較での分子進化もあるが、私の好みとしてはトリプトファンの新定量法の提案、サーモライシンに代表される蛋白質分解での特異性の発想転換、そしてアイソトープを利用した蛋白質C末端ペプチドの単離と構造決定などがある。“素人の蛋白質科学者”とか“たたき大工”とか言われたが、元々私は学者を名乗れるタイプではない。家族とのしがらみで5年余の後、サントリー（ここでも佐治敬三氏にはお世話になり、「やってみなはれ」の社是に賛同）に、そして一年後に阪大理学部に着任した。定年までの22年余は多くの先輩、同僚、後輩、そして家族に支えられ、苦楽を分かち合い、最後には岡山理科大学に8年間奉職した。今は囲碁と化石を楽しんで過ごしている。

海外生活のすすめ

大阪大学医学系研究科 /
免疫学フロンティア研究センター 免疫動態学
早坂 晴子

最近、海外留学を目指す若い研究者が減少しているらしい。もちろんこれは、かつてほど日本国内と海外の研究レベルの差がなくなってきたという喜ばしい結果でもあるが、特に若い世代が失敗を恐れ、安全指向であることも影響しているだろう。「日本で質の高い研究もできるし、英語も学べる。リスクを考えると国内で十分」と思われる方もいるだろう。しかしあたりまえの事であるが、旅行で行くのと、そこで生活するには大変な違いがある。私はポスドクとして米国に5年間滞在した。その間、研究だけではなく（むしろ研究以外に）多くのことを経験する機会に恵まれた。留学体験記の多くは、海外での研究生活の困難さ、成功例、指南的な内容であるが、ここでは留学中に私が体験した、ちょっと日本ではありえないような出来事ベスト5を書いてみたい。これから海外留学を考えている人にとって、少しでも参考になれば幸いである。

第5位 [thunderstorm]

私が留学した米国バージニア州シャーロットビル（ワシントンDCから車で約3時間南に下った小さな町）では、時々猛烈な雷雨

(thunderstorm) がある。雷を伴い、比較的短時間なので日本での夕立に近い。ちなみに米国の天気予報は日本とは比べ物にならないくらい正確で、本日5時頃雨、といったらどんなに晴れていても降る（さすが軍隊を持っている国です）。このthunderstormのために、私たち家族が住んでいた貸家は度々床上浸水をくりかえした。米国の一戸建ての家は地下室がある場合が多い。私たちの家にも地下室があり、本棚、勉強机を置いていたが、大量の雨水が地下に侵入するいいかげんな造りであった。ある時椅子から立ち上がったところ、床を踏んだ感覚がなかった。絨毯マットが水に浮いていたのである。大家を呼ぶと、工事用の掃除機で大量の水を吸出し、やたらうるさい除湿機を貸してくれた。絨毯をベランダに運んで1週間ほど乾かし、毎日二回ほど除湿機にたまった水を捨てた。地下室は大型ハリケーンの時にも浸水した。このときは真夜中に停電し、2日間停電した。私たちの家は大学病院に近かったためこれですんだが、郊外に住んでいる人は1カ月の停電であった。停電すると、炊事どころではなくトイレも流せない。韓国系大型スーパーで買ったカセットコンロを友人に貸したところ、大変感謝された。

第4位「CIA」

私も夫も地域の弦楽オーケストラに参加し、時々音楽を楽しんでいた。浸水から立

ち直った地下室で、友人と合奏することもあった。その中の一人が、別の友人を「彼はCIAではないか」と言い出したのである。根拠は「職業がころころ変わる」「特定の地域への海外出張が多い」であるが、一番説得力があったのは「自分の父もCIAだった」であった。CIAの人は、自分がCIAですとは言わないらしい（当たり前か）。たしかに、他の友人は私たちの生活スタイルを気遣って、家に入るときは靴を脱いでくれるのだが、彼だけは靴を脱ごうとしなかった。自分たちにやましいことはないが、まさかと思いつながら一応家の中を搜索した（もちろん何も出てこなかった）。後日、夫がどこかの空港でたまたま彼を見かけたようである。声をかけたらひどく動揺していた（ように見えた）そうである。未だに真偽は不明である。

第3位「雷と火事とおやじ」

先に書いたが、thunderstormの時には、頻繁に雷が落ちる。その雷が、ある日向かいの家の屋根を直撃した。ちょうど長男が就寝するころなので、夜10時頃であったと思う。当事者である家の住人は寝ていて気付かなかったのだが、その隣の住人男性（おやじ）が煙に気付いた。彼は私たちの家のはす向かいに住んでいて、どうもいつも窓から近所の様子を見ているらしい。私たちも何度かコメントをいただいた。監視されているようで良い気持ちはしなかったが、今回はおせっかい

が幸いした。おやじの慌てふためいた様子に、すぐに私たちもただならぬことが起きたと気づき、火事の家に住人を起こすと共に、911通報した。しばらくして大型消防車3台とパトカーが到着し、我が家の目の前で真昼の様な照光と、消火活動が始まった。寝ようとしていた息子は、目の前のリアル消防車とヒーローの活躍に大興奮であった。

第2位「マリファナ」

実はこの一件が第1位であってもおかしくない。しかし私自身がその場に居合わせなかったということで第2位に甘んじた事件である。第二子出産直後の私を家において、夫、長男、日本から遊びに来ていた夫の母親、夫の叔父の4人が車に乗って旅行中、スピード違反で捕まった。米国ではこのような場合、ハンドルに両手を置いて待機しなければならない。運転席で待つ夫に近づいてきた警官は、開けられた窓に顔を近づけた途端、顔色を変えこのように言った。

警官 “Do you have marijuana?”

夫 (訳がわからず) “Pardon?”

警官 “Do you have Ma-Ri-Wa-Na?”

警官が言うには、車からマリファナの匂いがする、ということだった。つまり夫はマリファナ所持の疑いをかけられていた。この時、助手席と後部座席では、朝作ったおにぎりをパクつく夫の母親と叔父が……。 「のり」とマリファナの匂いが似ているかどうかはわ

からない、なにしろマリファナを吸ったことがないのだからという夫の説明に怪訝だった警官も、「もし疑うなら、おにぎりをあげるから食べてみろ」と言われ、”No, thanks”と言って退散したようだ。本当に「のり」はマリファナと同じ香りなのだろうか……。最初の質問の時、英語がわからず、日本人的笑顔で“ye~s”と答えてしまっていたら、と思うと恐ろしい。

第1位「真夜中の逃走」

真夜中の出来事である。家の中で息子に本を読んでいると、外で大きな音がした。すぐに地下室にいた夫を呼び、家から出てみると、車が我が家の前庭につっこみ煙をあげていた。運転手はけがをしている様子はないが、必死で車をバックさせようとしていた。車は動かないが、それでも、助けてくれ、と叫んでいた。夫が、タイヤが4本ともパンクしているから無理だよ、と言うと、男はあきらめて車から出てきた。この時ももちろん、いつもうちの様子を伺っている近所のおやじ(第3位の項参照)も家から出てきた。男と話すうちに、夫は男の様子がおかしいことに気付いた。必死で「明日車を引き取りに来るから、警察には知らせないでくれ」と頼み込む。私はすでに911通報していたので、日本語で(こんなとき便利)夫に「通報した」と伝えた。夫が男にこの事を伝えると、驚いたことに、男は走って逃げ出したのである。そ

の直後にパトカーが来たが、すでに男は逃走していた。実を言うと、逃げたにも関わらず男はすぐに捕えられた。この辺りは真夜中に人どおりはほとんどないし、移動手段は主に車である。そんな中、必死の形相で走る男……逃げていなくても怪しいだろう。翌日警察から電話があった。車は盗難車で、男は他の地域で犯罪に関わり保護観察中であった。酒に酔って、我が家の前のカーブを曲がり切れずにつっこんだらしい。とにかく男を捕まえたので、確認してほしいという連絡であっ



バージニア州シャーロットビル市の元自宅。
本当にいろいろな事があった。

た。これは困ったことになった。5人のうちから1人選べと言われて、日本人なら雰囲気
で区別がつくかもしれない。しかし、私は薄
暗い中で見た黒人の男の顔を正確に覚えてい
なかったのである。人間の記憶とは何と曖昧
なものか。必死で思いだそうとしていると、
再度連絡があり、男が罪を認めたので確認の
必要はない、ということであった。あの時の
男は今どうしているだろう。

この記事を読んで、こんな体験してみたい
と思った若い大学院生、学生諸君、すぐに海
外を目指しなさい。不自由な海外生活を体験
することによって、国内での当たり前の生活
が国外では保証されないこと、人間の多様性
を知ることができます。海外生活での体験は
自分自身のものの捉え方にバリエーションを
与えてくれることでしょう。きっと研究でも
役に立ちます。

今回残念ながら選にもれた小さいネタも
多々ある。これらについては、また別の機会
にご披露できればと思う。

生物学教室教職員名簿

平成 24 年 2 月 1 日

構造生物学研究室

教授 福山 恵一 (Keiichi Fukuyama)
准教授 大岡 宏造 (Hirozo Oh-oka)
助教 和田 啓 (Kei Wada)

生体分子機能学研究室

教授 倉光 成紀 (Seiki Kuramitsu)
准教授 増井 良治 (Ryoji Masui)
助教 中川 紀子 (Noriko Nakagawa)

生体膜機能学研究室

教授 金澤 浩 (Hiroshi Kanazawa)
助教 松下 昌史 (Masafumi Matsushita)

分子遺伝学研究室

教授 升方 久夫 (Hisao Masukata)
准教授 中川 拓郎 (Takuro Nakagawa)
助教 高橋 達郎 (Tatsuro Takahashi)

神経可塑性生理学研究室

教授(兼) 小倉 明彦 (Akihiko Ogura)
准教授(兼) 富永(吉野)恵子 (Keiko Tominaga-Yoshino)

細胞内情報伝達研究室

教授(兼) 河村 悟 (Satoru Kawamura)
准教授(兼) 橋本 修志 (Shuji Tachibanaki)
助教(兼) 和田 恭高 (Masataka Wada)

発生生物学研究室

教授 西田 宏記 (Hiroki Nishida)
助教 熊野 岳 (Gaku Kumano)

生物分子エネルギー変換学研究室

准教授 荒田 敏昭 (Toshiaki Arata)
准教授 井上 明男 (Akio Inoue)

核機能学研究室

教授 滝澤 温彦 (Haruhiko Takisawa)

准教授 久保田弓子 (Yumiko Kubota)

助教 三村 覚 (Satoru Mimura)

分子生物学・教育研究室

教授 米崎 哲朗 (Tetsuro Yonesaki)
助教 大塚 裕一 (Otsuka Yuichi)

植物生長生理研究室

教授 柿本 辰男 (Tatsuo Kakimoto)
助教 高田 忍 (Shinobu Takada)
助教 田中 博和 (Hirokazu Tanaka)

系統進化学研究室

教授 常木和日子 (Kazuhiko Tsuneki)
准教授 古屋 秀隆 (Hidetaka Furuya)
講師 伊藤 一男 (Kazuo Ito)

植物細胞生物学研究室

准教授 高木 慎吾 (Shingo Takagi)
助教 浅田 哲弘 (Tetsuhiro Asada)

理論生物学研究室

准教授 藤本 仰一 (Koichi Fujimoto)

神経回路機能学研究室

准教授 木村幸太郎 (Kotaro Kimura)

技術職員 大森 博文 (Hirofumi Ohmori)

事務補佐員 秋山 和子 (Kzuko Akiyama)

井ノ口左恵 (Sae Inoguchi)

宇田 祐子 (Yuko Uda)

大島みどり (Midori Oshima)

岡本江利子 (Eriko Okamoto)

隅田 理恵 (Rie Sumida)

高嶋 典子 (Noriko Takashima)

吉田美津子 (Mitsuko Yoshida)

生物科学専攻の研究室 (2012年2月現在)

基幹講座

理学研究科・生物科学専攻

- 植物生長生理研究室 (柿本辰男教授)
- 植物細胞生物学研究室 (高木慎吾准教授)
- 系統進化学研究室 (常木和日子教授)
- 発生生物学研究室 (西田宏記教授)
- 分子生物学・教育グループ (米崎哲朗教授)
- 理論生物学研究室 (藤本仰一准教授)
- 神経回路機能学研究室 (木村幸太郎准教授)
- 分子遺伝学研究室 (升方久夫教授)
- 核機能学研究室 (滝澤温彦教授)
- 生体膜機能学研究室 (金澤浩教授)
- 生体分子機能学研究室 (倉光成紀教授)
- 構造生物学研究室 (福山恵一教授)
- 生物分子エネルギー変換学研究室 (荒田敏昭准教授)

連携併任講座

情報通信研究機構関西先端研究センター
細胞機能構造学研究室 (平岡泰教授・原口徳子教授)

JT生命誌研究館
生命誌学研究室 (蘇智慧教授・橋本主税教授)

理化学研究所
生物分子情報学研究室 (城宣嗣教授・上田泰巳教授)

協力講座

生命機能研究科

- 神経可塑性生理学研究室 (小倉明彦教授)
- 細胞内情報伝達研究室 (河村悟教授)
- パターン形成研究室 (近藤滋教授)

蛋白質研究所

- 生体反応統御研究室 (長谷俊治教授)
- 神経発生制御研究室 (吉川和明教授)
- ゲノム-染色体機能学研究室 (篠原彰教授)
- エピジェネティクス研究室 (田嶋正二教授)
- 細胞外マトリックス研究室 (関口清俊教授)
- 細胞内シグナル伝達研究室 (三木裕明教授)
- プロテオーム物質創製研究室 (高木淳一教授)
- 生命維持情報ネットワーク研究室 (加納純子准教授)
- 蛋白質結晶学研究室 (来栖源嗣教授)
- 蛋白質構造形成研究室 (後藤祐児教授)
- 膜蛋白質化学研究室 (三間穰治准教授)
- 機能構造計測学研究室 (藤原敏道教授)
- 超分子構造解析学研究室 (中川敦史教授)
- 蛋白質情報科学研究室 (中村春木教授)
- 理論生体分子科学研究室 (原野雄一准教授)
- 蛋白質有機化学研究室 (相本三郎教授)
- 機能・発現プロテオミクス研究室 (高尾敏文教授)

微生物病研究所

- 発癌制御研究室 (岡田雅人教授)

遺伝情報センター

- 遺伝子情報学研究室 (安永照雄教授)

産業科学研究所

- 生体触媒科学研究室 (谷澤克行教授)

理学研究科・化学専攻

- 有機生物化学研究室 (梶原康宏教授)
- 超分子科学研究室 (原田明教授)
- 高分子集合体科学研究室 (佐藤尚弘教授)
- 高分子固体構造論研究室 (今田勝巳教授)

祝御卒業

理学部生物科学科

青木 巴奈	片山 雄太	田代 寛実	村山 大人	辻本 由起
飯田 幹之	金原 良樹	田中 怜	野上 奈央	柄澤 欣之
池田 愛	川脇 駿作	谷本 悠生	岩田 卓	呑村 優
泉田 響	岸 香苗	辻 岳志	岡本 晃大	平松 寛明
伊藤 大輝	岸本 亜美	中島陽志郎	角岡 佑紀	堀本 拓也
大仲 惇司	木原 梓	橋詰 晃一	北村 彩佳	松村 綾香
奥西 亮太	久保田峻亮	藤井 裕己	境 一樹	松本 侑大
笠嶋 越充	志賀 千明	宮竹 将	田中宏二郎	宮川 武朗

理学研究科 生物科学専攻 博士課程前期

OOI LING FAN	亀村 和昌	森本 彩	長谷川恭平	福永洋一郎
安藤 雄哉	吉田 真	西口 茂孝	長谷川昭文	片平 泰弘
伊田 知代	宮里 和実	前田 紗希	長田 麻由	北濱 一輝
井口 悟	金村 茂範	善福 沙李	沈 博	堀本 絢乃
井上 卓大	高井 進二	大下 晃弘	田中 康喜	齋藤 由佳
益田真都香	三澤 昭博	大迫 久晃	渡邊 彩	高橋 裕佳
岡野 紗知	山本 晃衣	滝 佳菜恵	梅本 哲雄	高木 彩圭
加藤 耕一	若林菜穂子	中村 達郎	白石 千夏	FARIA ZAFAR
岩崎 大地	出口 貴文	中島 美恵	八木樹里奈	宋 智勳
鬼頭 頼子	小畑 有以	長江多恵子	尾上 稔宜	

理学研究科 生物科学専攻 博士課程後期

中根 修平	藤原一志郎	西出 和彦	福浦 正義
柳 浩太郎	高橋 佑介	鈴木 慶	HANUMANTHU B. DURGA
植田 啓介	米谷 匡史	橋本 秀彦	PRASDA RAO

阪大理生物同窓会のホームページをご活用下さい。

同ホームページから会員登録や住所変更を行うこともできます。

<http://www.bio.sci.osaka-u.ac.jp/alumni/>

大阪大学同窓会連合会について

「大阪大学同窓会連合会 (<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/dousoukai/top.html>)」(以下「連合会」)は平成17年7月25日に設立されました。「連合会」は阪大理生物同窓会をはじめとする部局等個別の同窓会と連携しつつも互いに独立の活動を行う組織です。阪大の卒業生は2つの同窓会組織に入会することができます(ただし、連合会には入会手続きと会費納入(終身会費15,000円)が必要です)。

阪大理生物同窓会では、連合会との連携を生かしつつ、これまで通り独自の活動を継続して行くことを考えておりますので、いままで以上のご協力をよろしくお願い致します。

阪大理生物同窓会会長

米井 脩治

庶務・会計報告

1. 会員数 (2010年2月)

全会員数	3,713名
学部卒業生	1,111名
修士修了生	1,491名
博士修了生	841名
研究生等	270名
現職員	121名
旧職員	278名

2. 役員会、幹事会、総会の開催 (議事録は

<http://www.bio.sci.osaka-u.ac.jp/alumni/index.html>)

2011年11月6日に第17回役員会、第11回幹事会を開催した。

3. 同窓会誌編集委員会の活動

2011年11月6日に2011年度編集委員会を開催した。その方針に基き、同窓会誌第9号の編集作業が行なわれ、本誌の発行に至った。

4. 2010年度会計報告 (2011年3月31日監査済)

<収入>

前年度繰越金	4,066,849
年会費	586,000
設立基金	120,000
阪大同窓会連合会還元	53,000
名簿	3,5000
計	4,829,349

<支出>

同窓会誌第7号	564,261
同窓会講演会謝金 (西村いくこ先生)	20,000
卒業祝賀会	27,739
会議費・編集委員会関連 (交通費等)	24,596
あしなが育英会 (東日本大震災義援金)	92,357
(卒業祝賀会での募金7,643円と合せて10万円)	
その他 (通信費など)	320
計	729,273

<残高>

4,100,076

5. 会計監査報告

2010年度の会計について、2011年11月6日に品川副会長による監査が行われ、適切に処理されていることが確認された。

お知らせ

1. 名簿について

会員名簿 (2009年版に新規卒業生を追録したもの) をご希望の方は、同封の振込用紙に「名簿希望」とご記入の上、代金3,500円をお振込下さい。なお、個人情報の取り扱いにはくれぐれもご注意下さいますようお願い申し上げます。

2. 第13回理学部同窓会講演会のお知らせ

標記講演会が、4月30日 (月) 14時から16時まで、理学部本館5階大講義室 (D501) で開催されます。今回の世話学科は数学科・物理学科です。詳しくは最終ページのお知らせをご覧ください。

3. 役員会・幹事会・総会・懇親会のお知らせ

上記講演会にあわせ、生物同窓会役員会・幹事会を4月30日 (月)、理学部本館4階セミナー室 (A427) にて開きます。ぜひ、ご出席下さい。

役員会 12:30~13:30

幹事会 16:15~17:15

また、総会終了後、18:00より、懇親会を開催します。出席していただける会員の方は、4月20日 (金) までに事務局までお知らせ下さい。詳しくは最終ページのお知らせをご覧ください。

4. 卒業祝賀会のお知らせ

恒例となりました同窓会主催の祝賀会を、3月22日 (木) 16:30から、理学部本館3階B308講義室で開催する予定です。毎年多数のOBのご参加を得て、たいへん盛大な会となっております。新しい同窓生の祝福に、是非お越しください。出席していただける会員の方は事務局までお知らせ下さい。詳しくは最終ページのお知らせをご覧ください。

5. 同窓会庶務からの提案

－「10年毎ミニ同期会の呼びかけ」

庶務幹事会では、卒業後10年、20年、30年（学部換算で）を迎えられる同窓会員の方々に、4月30日（月）に開催される大阪大学連合会ホームカミングデイ行事（午前・大阪大学会館（旧イ号館））・理学部同窓会講演会（14-16時）・生物同窓会総会（16:15-17:15）・懇親会（18:30～）に参加していただいて、それを契機に例えばミニ同期会のような集まりが生まれればよいのではないかと考えています。

今年度は、以下の卒業年（学部相当）会員の方々に呼びかけをしたいと思えます。これを機会に集まってみようという場合には、同窓会庶務幹事ないしは該当する学年幹事にご連絡ください。

1962（S37）：安藤和子幹事：

kazuko.ando@kyofau.ac.jp

1972（S47）：倉光成紀幹事：

kuramitu@bio.sci.osaka-u.ac.jp

1982（S57）：恵口 豊幹事：

eguchi@gene.med.osaka-u.ac.jp

1992（H4）：高森康晴幹事

2002（H14）：花木尚幸幹事

生物同窓会庶務：

alumni@bio.sci.osaka-u.ac.jp

FAX:06-6850-6769、電話:06-6850-5813（米崎）

6. 会費納入、設立基金へのご協力をお願い

会誌や名簿の発行を含む同窓会の運営は、皆様の会費によって成り立っています。**ぜひとも会費の納入にご協力ください。**年会費は1,000円ですが、事務手続き簡略化のため、3年分以上をまとめてお納め頂ければ幸いです。同封の振込用紙の通信欄に「会費〇年分」とご記入のうえ、お振込下さい。

また、同窓会の財政基盤を安定させるため、設立基金へのご協力をお願いしています。1口2,000円です。振込用紙の通信欄に「基金〇口」とご記入の上、お振込み下さい。

今年度も多くの会員の皆様にご協力いただき、誠にありがとうございました。2011年度、設立基金にご協力いただいた皆様は以下の通りです。厚く御礼申し上げます。

7. 訃報

1950年～1958年と1974年～1988年の長きに渡って本教室の職員でありました 原 富之 名誉教授が2011年6月15日にご逝去されました。

＜設立基金醸出者ご芳名＞（2011年度に醸出くださった方）

相原 朋樹	河合 清三	松村 和美	島 博基	金田 大輝	永井 信夫	古谷 榮助
秦野 節司	和田敬四郎	油谷 朝子	若林 貞夫	和田 啓	中條真二郎	米井 脩治
緒方 正名	興津奈央子	橋本由香里	堀井 俊宏	相本 三郎	大宮 守一	滝澤 温彦
細川 守	信木 令子	小畑 有以	久保田幸彦	中村 壽	関 得一郎	青木 裕之
倉光 成紀	島 博基	宮本 昌明	寺田 博一	蘇 智慧	指吸 俊次	中川 紀子
長野麻衣子	北岡 祐	後藤 直久	安井 典久	大川 和秋	野津 敬一	東 隆親
鈴木 淳夫	西田 宏記	糸 昭苑	牧野 耕三	井上 誠士	秋山 典子	森川 一郎
大塚 裕一	岡本 明弘	島 善信	岩崎 俊介	立石 智	松井 仁淑	梶本 康子
大山 礼雅	菅 裕美子	松井 仁淑	中川 拓郎	二井 將光	和泉 太郎	
谷本 憲彦	大賀 拓史	菊山 宗弘	新美 景子	小池 裕幸	桑島 孝明	
中垣 剛典	妻鹿 友弘	小川 英行	久野 美峰	青野 博之	檜枝 美紀	

編 集 後 記

同窓会誌編集委員長 野崎 光洋

昨年3月11日、東日本全域を襲った未曾有の震災の影響を受け、今年度の生物同窓会の運営は変則的なものになりました。しかし、その中で、多くの方々のご努力とご支援により例年通り同窓会誌、Biologia No. 9 (2012)、を発刊することが出来たことは、ご同慶の至りであります。

私、本誌第3号から編集委員に加わり、第5号から編集委員長を4年間務めさせていただき、昨年度を最後に委員長を辞めることになっておりました。その時点で、次期委員長や委員の内諾を得、次年度に引き継ぐ旨、昨年のBiologiaの編集後記にも記載いたしました。ところが、例年4月に行なわれる筈の幹事会・編集委員会・総会が延期され、最終的に11月6日に行なわれました。そのため、今年度の役員の改選に間に合わず、編集委員長を続けざるを得ない破目になりました。

一昨年、編集委員就任をご快諾いただいた折井豊さんに昨年10月、委員会に出席いただくよう電話で連絡をしましたところ、ご闘病中であることをお聞きしました。それが彼との最後の会話となり、11月18日にお亡くなりになられたとのおはがきを頂き、大変なショックを受けました。心よりご冥福をお祈

りいたします。

今年もユニークな分野でご活躍の先輩諸氏に執筆を依頼いたしました。出版までの期間が短かったため、執筆者の方々にはご無理をお願いいたしました。皆様快くご理解・ご協力いただきご投稿くださいました。紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

また、理学部とは疎遠であった私が、5年間の委員長の責を無事果たすことが出来たのは多くの方々のご支援のおかげです。森田会長ならびに編集委員の皆様には大変お世話になりました。特に、編集の実務を担当していただいた古屋・大岡両学内委員には大きな負担をおかけしました。ここに厚く御礼申し上げます。

昨年の編集後記で紹介しましたとおり、前田ミネ子さんに次期編集委員長をお願いしておりましたが、体調不良のためご辞退され、新たに品川日出夫さんをお願いすることになりました。新委員長のもと、Biologiaが益々発展することを期待しております。また、会員の皆様方には、今後も変わらぬご支援を切にお願いいたします。

生物科学教室卒業祝賀会のお知らせ

恒例となりました、博士・修士・学士修了の皆様の祝賀会を、生物同窓会の主催により、3月22日（木）16：30より、下記の通り開催いたします。毎年、多数のOBのご参加を得て、大いに盛り上がっております。今年度も、生物同窓会会員、生物科学教室の教職員の皆様は、奮ってご出席下さい。ご出席いただける方は、下記連絡先まで、お名前、卒業年度、ご連絡先（メールアドレスまたは電話番号）を、電子メールまたはFAXにてお知らせ下さい。

祝賀会：16:30～18:30、大阪大学理学部本館B308講義室（豊中キャンパス）、会費2千円

連絡先：E-mail：alumni@bio.sci.osaka-u.ac.jp

FAX：06-6850-6769（米崎哲朗宛） TEL: 06-6850-5813

理学部同窓会講演会・生物同窓会幹事会・総会・懇親会のお知らせ

生物同窓会幹事会、総会、懇親会を、4月30日（月）に下記の通り開催いたします。会員の皆様は奮ってご参加下さい。なお、懇親会にご出席いただける方は、準備の都合上、4月20日（土）までに、下記連絡先まで、お名前、卒業年度、ご連絡先（メールアドレスまたは電話番号）を、電子メールまたはFAXにてお知らせ下さい。

第13回理学部同窓会講演会：14：00～16：00、大阪大学理学部本館5階大講義室（D501）

講師、演題は未定（世話学科：数学科、物理学科）

生物同窓会同幹事会：16：15～17：15 理学部本館4階セミナー室（A427室）

同懇親会：18：00～ 阪急石橋駅近辺、会費5千円程度

連絡先：E-mail：alumni@bio.sci.osaka-u.ac.jp

FAX：06-6850-6769（米崎哲朗宛） TEL: 06-6850-5813

大阪大学 大学院理学研究科生物科学専攻 理学部生物科学科 同窓会 役員・幹事名簿

2012.2.1 現在

会長	米井 脩治	49	荒田 敏昭	20	友池 史明
副会長	品川 日出夫	50	升方 久夫		菅家 舞
”	森田 敏照	51	堀井 俊宏	21	東 寅彦
庶務・会計	品川 日出夫	52	尾崎 浩一		間島 恭子
”	米崎 哲朗	53	釣本 敏樹	22	梅本 哲雄
”	久保田 弓子	54	清水 喜久雄		齋藤 由佳
名簿作成	升方 久夫	55	高木 慎吾	23	西原 祐輝
会計監査	関 隆晴	56	佐伯 和彦		吉川 由利子
”	西村 いくこ	57	恵口 豊	24	岸本 亜美
卒業年次	幹事氏名	58	宮田 真人		角岡 佑紀
旧 S27	吉澤 透	59	寺北 明久	25	
28	田澤 仁	60	紅 朋浩	26	
新 S28	松原 央	61	奥村 宣明	理学部同窓会常任幹事	松原 央
29	野崎 光洋	62	増井 良治	理学部同窓会特別幹事	米崎 哲朗
30	森田 敏照	63	久保田 弓子	同窓会誌編集委員長	野崎 光洋
31	永井 玲子	H1	浅田 哲弘	同窓会誌編集委員	永井 玲子
32	高森 康彦	2	末武 勲	”	清水 晃
33	石神 正浩	3	檜枝 美紀	”	前田ミネ子
34	赤星 光彦	4	高森 康晴	”	大岡 宏造
35	崎山 妙子	5	中川 拓郎	”	古屋 秀隆
36	油谷 克英	6	熊谷 浩高	Exofficio (専攻長)	倉光 成紀
37	安藤 和子	7	三村 覚		
38	湯浅 精二	8	笹(増田) 太郎		
39	山本 泰望	9	山田 芳樹		
	品川 日出夫	10	上尾 達也		
40	清沢 桂太郎	11	浦久保 知佳		
41	米井 脩治	12	松下 昌史		
42	徳永 史生	13	田中 慎吾		
43	梅田 房子	14	花木 尚幸		
44	最田 優	15	宅宮 規記夫		
45	酒井 鉄博	16	竹本 訓彦		
46	井上 明男	17	石川 大仁		
47	倉光 成紀	18	大出 晃士		
48	米崎 哲朗	19	城間 裕美		